



36 宮川香山

《青華氷梅文花瓶》

一点

明治二十七年（一八九四）

陶磁

径二六・〇、高四七・〇

明治二十年代から三十年代にかけてのわが国の陶磁のひとつの現象として、東洋陶磁の技術的な意味での最高峰とみなされた、中国の清朝陶磁への挑戦がある。清国の政情不安から国外へ流出した官窯製品が、ヨーロッパの愛好家や製陶業者に高く評価されたこと対応する動きである。しかし、それには磁器の質の改良、釉薬表現の多彩さなど、従来の製造技術をさらに向上させる必要がある、たんなる外形的な様式転換とは異なる困難をともなうものであった。実際に清朝陶磁の技術に挑んだ製陶家はかぎられており、相應の技術者のレベル、工房の規模、原材料の調達などが要求される事業であった。それらの困難をみずからの課題として引き受け、清朝陶磁の再現に果敢に挑んだのが宮川香山であった。本作は清朝康熙年間（一六三二～一七二二）の作風にならった青華（染付）の作品で、抑揚のある整った器形に、青色顔料でぬり埋めた地に氷裂文を描き、白抜きにして余白とした部分を梅の枝としている。明治二十七年の日本美術協会春季美術展覧会で二等賞銀牌を受賞した作品である。

宮川香山（一八四二～一九一六）は京都出身の製陶家で、明治維新後に横浜へ出て、海外輸出を主とする真葛焼をはじめた。海外での知名度は高く博覧会での受賞も多いが、第一回国博では龍紋賞牌、第二回は有功賞牌一等、第三回は二等妙技賞、第四回は妙技二等賞を受賞、第五回は審査官として出品をおこなった。明治二十九年に帝室技芸員に任命された。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

内国勸業博覧会 ― 明治美術の幕開け

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 57

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十四年四月二十一日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections